「気候の研究楽しい」「好奇心が原動力」

ノーベル物理学賞・真鍋さん

ノーベル物理学賞の受賞が決まった米国プリンストン大の気象学者、真鍋淑郎さん(90)が5日、米東部ニュージャージー州で会見し、「最もおもしろいのは、好奇心に基づいた研究だ。私は気候変動の研究を本当に楽しいと思ってやってきた」と語った。

▼6面＝後輩たちも祝福

真鍋さんは受賞が決まってから約8時間後の5日、大学で記者会見に臨んだ。ホールに姿を現すと、集まった学生たちから大きな拍手とスタンディングオベーションで出迎えられた。

「研究を始めたころは、こんな大きな結果を生むとは想像していなかった。好奇心が原動力になった。後に大きな影響を与える大発見は、研究を始めた時にはその貢献の重要さに誰も気付かないものだと思う」

「キュリオシティー（好奇心）」という言葉を繰り返し使い、研究にかけてきた情熱を表現した。

真鍋さんは東京大大学院を修了後、1958年に渡米した。米気象局やプリンストン大などで気候変動のメカニズムを研究し、60年代には地球の大気の状態の変化をコンピューターで再現する方法を開発した。

そうして発見したのが、大気中の二酸化炭素が増えると、地表の温度が上がるという地球温暖化への影響だった。近年では計算方法がさらに発展し、真鍋さんの研究を基にした計算結果と観測データがよく一致するようになっている。

ノーベル賞受賞については、「受賞者のリストを見ると、本当にすばらしい人たちで、とても厳格な選考をしている。私の研究は世界の危機について、少なくとも私たちの問題は何かという理解に貢献できたのではないか」と話した。

真鍋さんは大学で、名前の「しゅくろう」を縮めた「スキ」という愛称で呼ばれているという。会見に同席した同僚のトム・デルワースさんは、バスケットボールのスター選手の名前を挙げ、「私はいつも、スキを気候科学のマイケル・ジョーダンだと思っていた」と貢献の大きさをたたえた。

一方、真鍋さんは拠点も国籍も米国に移しており、1990年代後半に旧科学技術庁がプロジェクトに招いた際も、数年で米国に戻った経緯がある。

会見では日本の研究環境について、「好奇心に基づいた研究が減っているのではないか。米国では他人がどう感じるかを気にせず、自分のやりたいことができる。研究者としても、自分がやりたい研究は何でもでき、私は自分が使いたいコンピューターをすべて使えた。日本は、政策決定者と科学者がお互いにどうコミュニケーションするか、もっと考えなければならない」と指摘した。（プリンストン＝藤原学思、合田禄）

IPCC議長「多大な貢献」

国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）のホーセン・リー議長は、報告書の執筆にもかかわった真鍋さんらの受賞決定を受け、「気候変動に対する社会の認識が高まる中、気候変動の理解に多大な貢献をした科学者の業績がノーベル物理学賞に認められたことは心強い」と祝福のコメントを出した。

上ノーベル物理学賞の受賞が決まり、会見する真鍋淑郎さん＝5日、米ニュージャージー州、藤原学思撮影

下プリンストン大での会見後、祝賀会に向かう真鍋さん（左から2人目）＝5日、合田禄撮影

ゆかりの人は

時代を変革■兄貴分のよう

真鍋さんを知る人からは喜びの声が上がった。

「憧れの研究者。ニュースを見て、思わず拍手をしてしまった」。気象庁で予報課長をしていた古川武彦さん(81)は喜んだ。

天気予報や台風の進路予想は今や、1週間近く先まで出るようになった。おおもとに、真鍋さんの研究があるという。「世界の研究者の誰もが、シュクロウ・マナベの名を知っている。世界的な研究者なのに偉ぶることなく、気さくで、他の研究者の意見にも耳を傾けられる。一方で若い頃には、自身の研究方針が上司と衝突した際にも自分の考えを貫いたことがあったと聞いた。心より尊敬しています」と話した。

理化学研究所のスーパーコンピューター「富岳」で気象の研究をしている三好建正チームリーダーは、米国へ留学していた時に真鍋さんの論文を教材にした。「二酸化炭素がどのくらい増えたら気温がどのくらい上がるかを予測するなんて発想は当時、なかった。時代を変革した研究です」

地球温暖化をめぐっては2007年、IPCCにノーベル平和賞が贈られたが、真鍋さん自身、ノーベル物理学賞の対象ではないと見ていた。三好さんは温暖化が進む現状を念頭に「物理学賞の考え方が広がってきたのかなと思う」と読み解いた。

真鍋さんと40年来の親交がある山形俊男・東京大名誉教授は「兄貴分のような存在。プールで泳ぐのが趣味の気楽なおっさんで、いつ勉強しているのかと思うが、奥さんの話では、家では非常に勉強しているようだ。まるで自分の家族が受賞すると決まったような気分だ」と喜んだ。

東京大の後輩で、真鍋さんが渡米するまで同じ研究室で席を並べていた海洋研究開発機構の松野太郎フェロー（気象学）は「同じ気象学者として60年以上、近くで研究をやってきた。本当におめでとうと言いたい。真鍋さんは物理の原理をはっきり言ってきただけだが、研究者には温暖化を否定する人がいたのも事実だ。温暖化の影響が深刻化するなか、物理学として温暖化の事実を公式に受け入れ、そういう人たちに反省を促すという意義が今回の受賞にあるのではないか」と語った。